

発行元  
東京新聞  
南千住専売所  
TEL3803-1781  
発行責任者  
鬼塚 佳代子  
TEL090-2657-0300

# すまいるたうん



第307号

平成26年

12月13日

## はい！東京新聞です

取材現場のつぶやき



突然の解散、衆院選です。その取材やデスク業務で、師走に入ってから大忙しの毎日を送っています。

十四日が投票日です。この「すまいるたうん」が配られるのは十三日ごろの予定ですので、選挙で頭がいっぱいの私ですが、ここでは選挙のことはあまり書かないでおきます。

どのような結果になるにせよ、国会は私たちの暮らしや未来を決める大切な場です。そこで何が議論されているのか、いけないのか。何が決められたのか、それが私たちにどうして大切なことなのか、私たちの願いに沿っているのか、ずれているのか。しっかりと見極めて、紙面で皆さまにお伝えしていかなくてはいいけないと思っています。

ノーベル賞の授賞式がありました。日本人三人が物理学賞を受賞したことは、みなさんも喜ばしいニュースとして受け止めたと思います。私も、かつて取材した人が受賞したことを、とても嬉しく思いました。

以前にもこの欄で書きましたが、私は名古屋で記者をしていたころ、大学の取材を担当していました。この取材はとても幅が広く、学生のサークル活

動や国際交流活動といった話題から、大学教授の研究成果、さらには大学病院で医療の取材もしました。

その取材の一環で、名古屋にある名城大学も三回ほど訪ねました。いずれも今回、ノーベル賞を受賞した三人のうちの一人、赤崎勇先生の取材のためでした。

当時すでに、半導体や発光ダイオード(LED)研究の分野で有名だった赤崎先生は、名古屋の大学担当記者としては目が離せない存在でした。と言っても、法学部出身で理科も数学も苦手な私にとって、研究内容を理解するのは一苦労でした。二十年も前のことなので、まだLEDは身近な存在ではありませんでした。

先輩から勧められた入門書を、入門書とは思えないほど難しいなあと思いつつ読み、取材に際しては、失礼とは思いつつも、わからぬ点を何度も質問して、何とか記事を書いた覚えがあります。

このときの取材は、半導体の基礎研究で赤崎先生が、ある賞を受賞したという内容でした。その際、赤崎先生は、「この賞は、私の弟子との共同受賞。弟子のことも記事にして下さい」とおっしゃいました。赤崎先生は当時、六十五歳。研究室にいた、赤崎先生と同じように、穏やかで謙虚な感じのお弟子さんは当時、三十三歳でした。私は、赤崎先生の記事とは別に、このお弟子さんのことも、小さな記事ですが、書きました。

このお弟子さんこそが、今回、赤崎先生と共同でノーベル賞を受賞した、天野浩先生だったのです。当時は名城大の講師でした。

その後、私が転勤で東京に戻ってから何年かすると、赤崎先生の研究はさらに注目を集め、ノーベル賞候補の一人として新聞で紹介されるようになりました。それが、天野先生と共同でノーベル賞を受賞するとは…。驚きとともに、とても嬉しく思いました。

繰り返しになりますが、赤崎先生と天野先生は、本当に穏やかで謙虚な方だった印象が強く残っています。

お二人が発明した青色LEDは、道路の信号機に広く使われるなど、暮らしに欠かせないものになっています。はるか昔、ごくわずかな回数とは言え、お二人に会って取材した経験から、おごり高ぶったりしない、謙虚な人こそ、未来に残る偉大な業績を残すのでは、と実感した次第です。

取材や日常生活では、たくさんのお会いがあります。小さな出会いも一つ一つを大切に、みなさまにより良い記事をお届けしたいと考えています。

(東京新聞 社会部 部次長

「前・したまち支局長」 榎本哲也)